国際医療協力
海外だより ⑰

カンボジアを想う
－ゆったりした時の流れと勢いの共存する場所－

国立国際医療研究センター　国際医療協力局
人材開発部研修課 看護師　菊池　識乃

皆さんにも、国内外に関わらず、どこか不思議なつながりや巡り合わせを感じる場所があるのではないでしょうか。そう聞かれたとき、私は、東南アジアインドシナ半島の南部に位置する「カンボジア」が思い浮かぶ。

私にとってカンボジアは、海外への興味を持った最初の記憶と近いように感じている。小学生の頃、教科書で見た銃を背負った少年の写真は、カンボジアのものだったように記憶する。同時期に「このままでは、アンコールワットがなくなる（修復しないといけないという話だったのではないか？とのちに推察）」というニュースを見て、「なくなる前に行かないと！」と強く思ったのを覚えている。おそらく、他にも行ってみたい国はあったと思うが、今思い返すと、その頃から一番行ってみたい国は、ずっとカンボジアだった。と言っても、当時はカンボジアの歴史的背景等もよく知らず、ただただ「アンコールワットがなくなる前に見に行きたい」と思っていた。自分のことながら、子どもの発想とその後の頑固さには驚く。

初めて一人で行った海外旅行は……カンボジアだった。念願叶って見ることができたアンコールワットは、まさに修復の真っ最中、正面の一部がブルーシートで覆われていた。（写真①）今思えば、ブルーシートで世界遺産（アンコールワット）を覆って修復作業をするなんて、とてもカンボジアらしいとも思えるのだが、当時の私は、単純に残念に思うと同時に「これで、しばらくはなくならない！」と、子どもの頃に抱いた心配をまだ引きずっていた。この旅行の途中、ある孤児院に訪問する機会があった。短い時間ではあったが、そこで出会った少女との何気ない会話の中で「お姉さんは、親はいますか？」と、とても自然なトーンで聞かれた。会話の自然さとは裏腹に何とも言えない違和感のような衝撃のようなものが私の中を走った。そして、その後の旅行中もこの違和感は、心の片隅に留まっていた。

初めて長期滞在した国も……カンボジアだった。青年海外協力隊員として、首都プノンペンから南に80㎞程の所にある、ベトナムと国境を接する州の

写真１　修復中のアンコールワット

写真２　任地の中心エリア

病院で活動させてもらった。プノンペンは、建設ラッシュのようであちらこちらで高層ビルが建設され、おしゃれなカフェやレストラン等も多くあり、主要な道路は頻繁に渋滞していた。決して交通マナーが良いとは言えないプノンペンの通りを横断するのは、私に課された最初のミッションだった。数週間後、何とか横断できるようになった頃、任地に赴任となったのだが、そこは道路の真ん中も歩けるのではないかと思うくらい、のんびりした所だった。（写真②）協力隊の活動は、話し出すとこの紙面では終えられないくらい話してしまうが、一言で言うと「ゆったりした時の流れと大きなパワー・勢いの共存を感じる」時間だった。一年中、日本の夏のような気候のカンボジア、暑さのせいもあるのか、何だかのんびり・ゆる～い感じもあるのだが、何かをやるとなった時のパワーと勢いには、何度も驚かされた。活動の一つとして、５S-KAIZEN活動を導入したところ、当初の私の予想を大きく裏切り、病院内で一種のブームのようになった。ほとんどのスタッフが５Sという言葉自体聞いたことのない状態からのスタートであったが、目新しさからか、視覚的にも理解しやすい手法が功を奏したのか、私の拙い英語とさらに微妙なクメール語（カンボジア語）の説明で伝えられたのはわずかだったように思うが、そこからスタッフ同士・部署間での相乗効果が大きな勢いとなったのではないかと感じている。興味なさそうにしていたおじさん（ある病棟の師長）が、手の空いた時間にナースステーションの大掃除をしたと聞いた時には、そのギャップと師長として病棟の問題に率先して取り組む姿勢に、私も勇気づけられた。どこかの病棟が病室やベッドの大掃除を始めると、連日、次から次へと他の病棟も掃除している様子は、とても喜ばしいことであり、その連鎖反応が興味深かった。何よりも、どこかを整理したり、何か新たなことに取り組もうとしたりしているときの、スタッフの笑顔は今でも忘れられない。そして、このブームが去ることを心配したが、５S-KAIZEN活動導入して2021年で５年目になるが、時折病院のSNS等で活動が共有されているので、まだひとまず余波は残っているようである。今後、機会があれば、活動を続けている正直な気持ちを聞いてみたいところだ。

最近（執筆時　2021年５月中旬現在）では、カンボジアでも新型コロナウイルス感染症の大規模な市中感染が発生し、首都を含む複数の地域でロックダウン等の対策が取られている。私の活動していた病院も陽性者対応に追われているようである。そこで働く友人・知人たちを思うと、カンボジア・日本も含めて世界中で多くの人々が苦しめられているこの感染症の流行状況が、少しでも早く好転することを願わずにはいられない。今は、自分のいる場所で自分のできることをするのみであるが。

まだまだ国際協力の道に足を踏み入れたばかりであるが、これまでも・これからも、どこか不思議なつながりや巡り合わせを大切に、いつか、ゆったりした時の流れを持ちながら、何かをするときには常に全力で取り組める、そんな人になれたらと思う。その時には、またカンボジアにいるのかもしれない。

写真３　活動していた州病院(一番新しい建物)

写真４　なぜか連日みんなベッドを洗い出す